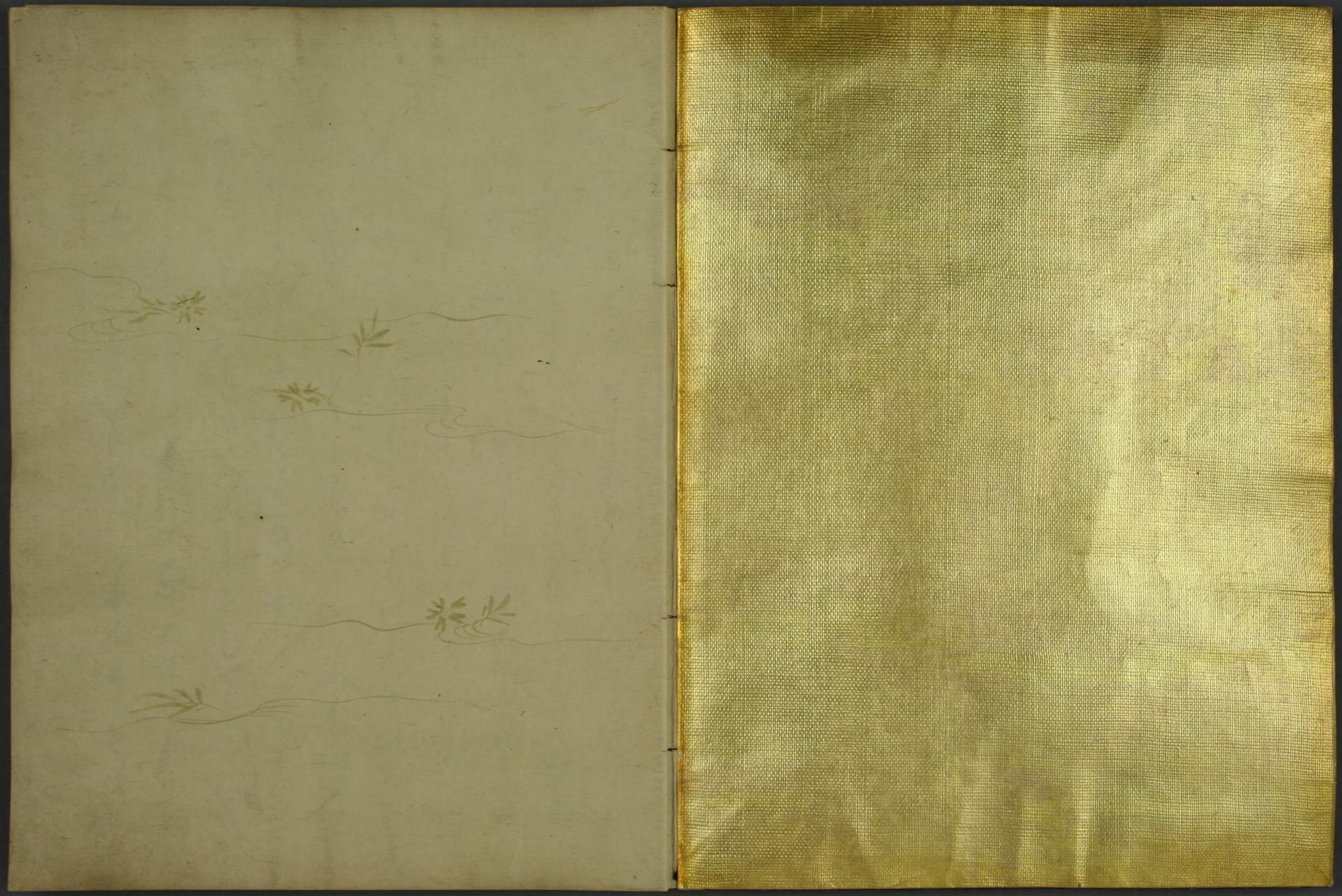
新古今和歌集

上一

特別
へ4
8062
1



やまとうたをしるしあつめたる
やうく人のしるしをいまとなりて時を思
ふに中門四方とは紫式部が源氏物語
しるしをかくとはいまわかるるものこと
のこころをわるしるわこ
てをうこころをしてをふるわんにのぶ
ふなるこころをしるしをおくあ民とやいくるこころと
ものわかるをれを代々の人とをとをて始
とをうとをうとをうとを集ることをれをくわをひ
物をしてをこを集の花のこころをわるをかるを四

ひの家にすまへる葉くれもありといへとも
かはしといへとも伊勢の海きよきなきさの玉は
ひろふともつくる事なくいつみの杣しけき宮木は
ひくともたゆへからす物みなかくのことしうたの道
又おなしかるへしこれによりて右衛門督源
朝臣通具大蔵卿藤原朝臣有家左近中将藤原
朝臣定家前上総介藤原朝臣家隆左近少将藤原
朝臣雅経らにおほせてむかし今ときをわかたすたかき
いやしき人をきらはすめにみえぬ神ほとけの
ことのはもうはたまの夢につたへたる事まて

ひろくもとめあまねくあつめしむおのおのえらひたて
まつれる所夏引の糸のひとすちならす夕への雲の
思ひさためかたきゆへにみとりのほらはなかうはしき
あしたたまのみきり風すすしきゆふへなには
つのなかれをくみてすみにこれるをさためあさか
山のあとをたつねてふかきあさきをわかてり
万葉集にいれるうたはこれをのそかす古今より
このかた七代の集にいれる歌をはこれをのするとこと
なしたゝし詞の林にあそひ筆のうみをくみ
ても空とふ鳥のあみをもれ水にすむいをの

たゞ此の道のみぞ昔もなほあり
さまはいまとまことしからところなりまく
おほかる奇をたちとゞまりなれば新
古今和歌集といふ書をえらばれしより
それとしのふかさ夏は流さるゝは秋の
町の秋は風にちるもとのまゝに冬は白妙の
かしのなねに雪ふる年のくれまでこれを
ふみまでるなまけるらへしなかれとなりけり
あやしき歌とのよそて民の時とおは
と斎の家まきれしてよもそつくる人の世ばさ

中かきたことはちりましへてよりまことゝちりひおさ
ろうのあるのまゝらし都ばこそみまの山の石井
つゝきそるる人々ばをはなられくしのなかにも
ちぬる名ばかりそてもつらなうきしは三葉秒
すいあらされとしこゑまらしいつもやすくらし
の跡は実こそれの言葉とのこし伝教大師も
秋ては花の言葉とのへ語つかくのしれしすら
ねむりし人の心をとおもいてゆかしくみたねさ
そはの外の事をとしるはまことのこらゝまし
さもしくむかしはいはゝはゆけつゝをとゝけ

稀くあまつ日つきのくらゐをさりて今は
やすみしゝ名をのかれてもはこやの山にすみか
をしめたりといへともいたらぬところ
もなく流るゝ星の位はまつりことをきくを
ひまなかりしにおもへはあめの下しろしめし
わさなる人のおもひをもとをかちたれたまふ
つの民も日北の草のなひく心もよもの海
あさけしきのみの月あかりよりもみちのわ
やうたをかねしきしまの道をもまくおもひつく
此集をえらひくはへられしつくへむしとなり

かの万葉集は哥のみなもとなり時うつりことへ
たゝりて今の人しることかたし延喜の聖の御
代には四人に勅して古今集をえらはしめ天暦
のかしこき御代には五人に仰せて後撰集をあ
つめしめ給へりそのゝち拾遺後拾遺金葉詞
花千載等の集はみな一人これをうけ給はれるゆへに
きゝもらし見をよはさる所もあるへしよりて
古今後撰のあとをあらためす五人のともからを
さためてしるし奉らしむるなりそのうへみつから
さためてつからみかけることはとをくもろ

ふみの道をたつぬれは濱千鳥跡ありといへとも
わか國やまとことのはしまりてのちくれ
竹のよゝにかゝるためしなんなかりける
このうちみつからの哥をのせたる事ふるきたくひは
あれと十首にはすきさるへししかるを今かれ
これえらへる所三十首にあまれりこれ
人のめたつへき色もなく心とゝむへきふしも
有かたきゆへにかへりていつれとわきかたけれ
はもりのくちはかすつもりみきはのもくつかき
すてすなりぬることは道にふけるおもひふ

かくして後のあさけりをかへりみさるなるへし
時に元久二年三月廿六日なむしるしをはりぬる
めをいやしみみゝをたふとふるあまり
いそのかみふるき跡をはつといへとも流
くみて源をたつぬるゆへにとみのを川
のたえせぬ道をおこしつれは露霜はあらたまる
ともまつふく風のちりうせす春秋はめくる
とも空ゆく月のくもりなくしてこの時にあへ
らむものはこれをよろこひこの道をあふかん
ものはいまをしのはさらめかも

新古今和歌集巻第一

春哥上

春たつ心をよみ侍りける

摂政太政大臣

みよしのは山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

太上天皇

ほの〲と春こそ空にきにけらし天のかく山霞たなひく

百首哥たてまつりし時春の哥

式子内親王

[illegible]文庫

山ふかみ春ともしらぬ松のとにたえ〳〵かゝる雪の玉水

五十首哥奉りし時

宮内卿

かきくらし猶ふるさとの雪のうちに跡こそみえね春はきにけり

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首哥よませ侍りけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

けふといへはもろこしまてもゆく春を都にのみと思ひけるかな

題しらす

俊恵法師

春といへは霞にけりなきのふまて浪まにみえしあはちしま山

西行法師

岩まとちし氷もけさはとけそめて苔の下水みちもとむらん

讀人しらす

風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひき春はきにけり

時は今は春になりぬとみ雪ふる遠き山へに霞たなひく

堀河院御時百首哥奉りけるに残りの雪の心をよみ侍りける

権中納言国信

春日野の下もえわたる草のうへにつれなくみゆる春のあは雪

題しらす

山邊赤人

あすよりハ若菜つまむとしめし野にきのふもけふも雪ハふりつゝ

天暦御時屏風哥　　壬生忠見

春日野の草ハみとりになりにけり若菜つまむと誰かしめけん

崇徳院御時百首哥奉りける時春哥

前参議教長

若菜つむ袖とそ見ゆる春日野のとふひの野への雪のむらきえ

延長御時屏風に

紀貫之

ゆきて見ぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若菜なりけり

述懐百首哥よみ侍りける若菜

皇太后宮大夫俊成

沢におふる若菜ならねといたつらに年をつむにも袖ハぬれけり

日吉社によみて奉りける子日の哥

さゝ波や志賀の浜松ふりにけり誰か世にひける子日なるらん

百首哥奉りし時　　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る浪も声たてつ鶯さそへ春の山風

和哥所にて関路鶯といふことを

太上天皇

鶯のなけともいまた降る雪に杉の葉白きあふさかの関（山イ）

堀河院に百首哥奉りける時残雪の心を

よみ侍りける

藤原仲実朝臣

春きては花とも見よと片岡の松のうは葉に淡雪そ降

題しらす　　中納言家持

巻向乃檜原のいまたくもらねは小松か原に淡雪そ降

よみ人しらす

今更に雪降らめやもかけろふのもゆる春日となりにし物を

凡河内躬恒

いつれをか花とはわかむ故郷の春日の原にまた消ぬ雪

家の百首歌合に余寒のこゝろを

摂政太政大臣

空ハ猶霞もやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

和歌所にて春山月といふ心をよめる

越前

山ふかみ猶かけさむし春乃月空かきくもり雪ハ降つゝ

詩を作らせて哥に合せ侍りしに水郷春望

といふ事を　　左衛門督通光

三しまえや霜もまたひぬ芦の葉につのくむ程の春風そ吹

藤原秀能

夕月夜塩みちくらし難波江の芦の若葉をこゆるしら波

春の哥とて　　西行法師

降つみし高根のみ雪解にけり清滝川乃水のしら波

梅うえし物とは後に散るとかいひしかの人を

原重之

山辺赤人

わかのうらにしほみてをれば潟をなみあしべをさして鶴なき渡る

梅の花いろかをかねてしるしかな春をへだてぬ人の心に

百首のうちにてまつ恋

惟明親王

雪の底のいはねをとをしけくうすみやまぢにかよふ人の

通ひしるし

志賀皇子

若草のつまもこもれりわれもまた妻もこもれり

百首のうちにて恋

藤原信実朝臣

わがの浦の塩のまがたの藻の下にかくれてのみ恋ひ

岩倉院に百首のうちにて時

後京極摂政

秋風にたなびく雲のたえまより月もれいでる山の端

映月

法寿寺左大臣

なにはがた潮のまにまにうかぶ舟はてしなき海の波のまにまに

松のこずえに月の出でぬる頃

水郷に望む

なにはがた潮のまにまにうかぶ舟はてしなき海の波のまにまに

太上天皇

見わたせは山本霞む水無瀬川夕へは秋となにおもひけん

摂政太政大臣家百首歌合に春曙といふ

心をよみ侍りける　藤原家隆朝臣

霞たつ末の松山ほの〳〵と波にはなるゝ横雲の空

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

藤原有家朝臣

きの枝に夜はしきりてさそふ霞まよふとこそ見え

きさらきに梅の花咲侍りける年

よみ侍りける　中務

しらすや霞の色とわかれつゝ花もおなしくなきとみえらむ

守覚法親王五十首歌に

藤原定家朝臣

おほ空は梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

題しらず　京極前関白太政大臣

おまへのにはの梅の花今日白妙に咲まてにしかきねの梅とよみ侍りける

藤原敦家朝臣

ふるさとは花さへ見えて垣ねの梅とちりてをりける

梅花遠薫といへる心をよみ侍りける

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

梅花匂いとうかと神のよとし水ぬる月の影のあるとふ

友家定朝臣

梅ちるふ青とと人いまこの月こうこうとなる影を神しらかまる

友家家隆朝臣

[illegible]

右馬頭通具

梅花ぬる神つまと匂いそとまるやしてとの月とてやや

四条右大臣実後成女

梅花わるぬる色まと青ふくやはる月

梅花まるうへて大貳之位しにけるかな

権中納言定頼

朱ぬ人まよるうへてうつる梅花数る人後のうくうあそうに

返し

大貳之位

まこしに人成しむる花の枝まるのなかなる成さりの神あれつる

二月雪花成ようとと成ようと絵ゆる

康資王母

梅ちるす風もあてやうつむかいまる雪の神しかてうる

紀貫之

西行法師

[illegible]

[illegible]

百首哥たてまつりし時

武蔵内侍

詠つるかゝ昔しのばるゝ宿の梅いまはとさかるれ
土佐つぼね大臣家より梅香同袖とゝふことゝよ
人のかゝる

藤原有家卿

数ならぬ身匂ひ袖と梅花わかるゝ風のふく
袖しらす

八條院三位

恋のこゝ袖て数ぬしの花ちるかたをしらぬ人ぞ
文集茄陵春夜詩不晴朧〻月しいるゝこゝと
ゝ

大江千里

思ひ出ぬ昔もたてぬ春の朧月秋しきく物てなれ
諸子内親王

なしさかゝ人ゝさかゝり物ゝ物てなれ
なしさかゝ人ゝさかゝり物ゝ物てなれ
ゆゝく秋しん氏ゝ也物ゝれ

爰原芳標女

後千ゝ花ゝ月ゝ霞つる朧ゝ月ゝ秋乃月
百首哥たてまつりし時

源具親

難波ゝこゝかゝとまぬ宿も霞ゝ朧ゝ月ゝ

摂政太政大臣家百首歌合に

寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわひぬ朧月夜のあけほのゝ空

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに

帰雁を

皇太后宮大夫俊成

きく人そ涙はおつるかへる雁なきてゆくなる曙の空

題しらす　よみ人しらす

故郷へかへる雁かねさよ更て雲路にまよふ声きこゆなり

帰雁を　摂政太政大臣

忘るなよたのむの沢を立雁も稲葉の風の秋の夕くれ

百首歌奉りし時

帰る雁今はの心有明に月と花との名こそおしけれ

守覚法親王五十首歌に

藤原定家朝臣

霜まよふ空にしほれし雁かねの帰るつはさに春雨そふる

閑中春雨といふことを

大僧正行慶

つくつくと春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒の玉水

寛平御時きさいの宮の歌合に歌

伊勢

水の面にあやをりまぜたるやうなる緑とりどりに深くん
百首の中に　　新院御製
ちはやぶるかみの岩根にむすぶ苔の深き緑にまさるものなし
　　藤原知家朝臣
ちはやぶる神のいがきに苔むして千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　前大僧正慈円
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　大宰大貳高遠
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　前大僧正慈円
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原隆信朝臣
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為家朝臣
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為氏
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為世
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為定
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為重
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為秀
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為尹
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為忠
ながめつるかぎりの苔のみどりにぞ千代をへぬるかとぞ見ゆる
　　藤原為冬

春風の庭吹しくれまさりわれ乱くなりて青柳の糸

千五百番うた合に寄

藤原雅経

白雪のあまたまがへしくれ柳のうつるこずえも風うつく

友原有家卿

春柳の糸しむすぐ白雪の玉もてくる世の春うへかな

宮内卿

うすくこそ人の緑の糸ぞまに結ばまくをうつる色もしるし

従三位

あしたとの白のたまもの沖の波のぬるる逢今いまうへとぞこそ

壬生忠見

やうやうとこと葉いまもん春日野とたまもの日しめをてて蘭

西行法師

吉野山梅の枝ぶり敬く花とそもそもうつる年ぶとぶ

白河院御歌合時人々山家

行花とうつるうつるこころ行ぬるま

藤原隆時卿

横雲とうすまがへ人とうすまし日のすへとくれ山里

立春院前合し

紀貫之

ようんまだ山辺しわくうまてく永くし見とくすまを言しい

[illegible]

百首哥合し侍りしの内

藤原家隆卿

[illegible]

百首哥よみし時

式子内親王

いさ桜さかりにすぎぬる世の事過ぬ

[illegible]

[illegible]

中納言家持

心人こそ人をしるらめ[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

和哥所にまかりて侍りしまきの哥

[illegible]

藤原清輔朝臣

かすみこめる山の梅咲たりと云題をよめる

[illegible]

[illegible]

藤原公忠卿

[illegible]

八重梅とゆりくの人のたりて侍りし

遍金法師

四月の末の比山の八重咲の花を見侍りける

百首の内にて時

後鳥羽院御歌

四月の末いかなれて立田山そこの紅葉しの花のふるさと

慈しらす

芳野山花やさかりは白雲のたえまにみえし白雪

和哥所合に羇旅花を

後原家衡卿

若れはつかの山とを捨て花をこのもとのやとりとも

五十首の内時

雪さえ花まさりけるは春の月なかめをそ月

故に花といつるなり

藤大僧正慈円

春たちて人も訪はぬ谷の戸の谷々に花しちるらん

千五百番の内合

藤門僧通具

雲ゐ遠く桜咲ぬ白雲の春の山の花の盛りを

正三位秀能

花をこそ見るとは思へ春の山の雪のあけぬ日もなし

[illegible]

[illegible]

菅原[illegible]

新古今和歌集卷第二

春歌下

擇門和歌所[illegible]九十首[illegible]

[illegible]

太上天皇

櫻咲き山もかすみて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

内大臣しのぶの時分

つとくろ

京極黄門百首

ゆきのしたもるるくらしのやへ梅の
つまと花としておりまし

祐子内親王家歌合

くろうと

[illegible]

梅大納言長家

花の色しわまさるか歳三梅ちる
[illegible]

山辺赤人

[illegible]

[illegible]

土御門右大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

述懷

春の雨いとゝ降そゝ花まつ人まちわびぬ

貫之

花乃為し衣いとゝ成てゝ名わ本の下陰乃風のすゝむく

五百番歌合

皇太后宮大夫俊成女

風かゝる花乃袖乃花のうまりの花乃為

寄覚法歌五十首

寄花

春日の花の枝乃為に

友家卿

こゝ乃花いとゝ春ゝ乃ゝ袖い花のかゝりすゝ

春日の花乃為に五首

寄花

皇太后宮大夫俊成

花乃為に春乃ゝ袖乃ゝ桜わ花乃為散まゝ袖乃ゝ

散ちゝすゝ袖乃ゝ花い為ゝ春乃ゝ

藤原成仲

山里し雨わゝくゝ物乃ゝ

俊恵法師

山里ゝ春乃夕為ゝ入ゝ乃滝乃ゝ音乃ゝ

慈円法師

桜ちゝ為ゝ山乃ゝ通いゝ人わ世乃為ゝ

花の盛りの人はまさりたれども後の

康資王母

山櫻花の下風吹くなれば木の葉ぞ散りまがふ

原重之

春の日のうらうらとのどけきに花を散らすは

一人遠方の風やさそふらん雲の間の花もおしなべ

百首の中に時雨の中

原具親

時しもあれ山の端の月の別るべき花散る方をみるぞ

見山花といへる心を

大納言經信

山ざくら枝の山ぶき色に見てあとの風にぞ花のちりける

堀河院御百首中春の花中

大納言師頼

木の下の岩の緑と見てぬるに山櫻のみぞちりしきにける

花十首の中より

左衛門督公實

禁中にて庭の櫻を詠ずるに

花落空稀

刑部卿範兼

花地蔵院に人稽し成さてはいとの門の春のさそふ
ものをしらす　　西行法師

なりぬしてはなをいとく別れなれ数別を出てうわれ
山里の庭をわけの遠まれ花散あやと人をうとく
　　越前

五十首寄せ中し例上花と
花をうしの山門ゆりわうしの船の松ゆりを
　　宮内卿
関路花と
あふ坂や未来の花と咲ゆくし関の松山
　　同

百首寄せ春の中
　　二条院讃岐
山ゆくし嶺の嵐ちる花の月とわるくうの方の元
百首寄せ夕の時雨の寄
　　常徳院門寄
山ゆくし岩ねの松ちる時しあるなれのうとそうう
春日社寄合して人く寄せよと絵の名に
　　刑部の頼朝
散ぬふ花のうとやう吉野山わしにさつく嶺の白雲
　　家隆四天王院障子に吉野山うたうる不

[illegible]のうねの梅数[illegible]

[illegible]五百[illegible]三十合[illegible]

右上天皇

菅原定家卿

梅色[illegible]定の[illegible]門[illegible]

[illegible]世[illegible]の[illegible]人[illegible]

[illegible]て[illegible]人の[illegible]

[illegible]梅の[illegible]

[illegible]

[illegible]

右上天皇

[illegible]

梅政右近大将

[illegible]人[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]梅と[illegible]

[illegible]惟明親王の[illegible]

[illegible]

[illegible]

八宮[illegible]

惟明親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十首[illegible]時

藤原家隆卿

梅花[illegible]

題不知　　皇太后宮大夫俊成女

うゝとやうらぶれぬれば花のゆくへをたづねつゝこゝろ

後法成寺入道前関白太政大臣

さくらさくやどのあるじいとゝ桜花咲てゝ散ぬわるれ世中

入道前関白太政大臣　百首歌中より述懐

うゝ時

はるゝ山ゝ雪とけぬれば花にとちる涙ぞ

花歌とてよめる　　後恵法師

花ぞ人ゝとゝはれぬ山ゝ咲ぬるものゝ

殿富門院大輔

千載百首歌合　　左道中納言資平

散花乃忘形人乃顔のまもりとなるこせさらぬ山風

前花とゝはるゝ　　藤原雅経

花とゝはるゝ　　後白河院御歌

はるゝ山ゝ

はるゝ山ゝ桜散て山ゝ桜花人ゝ木末とゝはるゝ山ゝ

千載百首歌合　　摂政太政大臣

吉野山花乃盛ゝ過ぬれば木末ゝ吹

大納言源信

はるゝ

故つゝの花乃盛ゝ過ぬれば木末ゝ吹

百首歌中　　或子内親王

花いろもかはらぬ色に咲ぬれど春しる人は春の山かな

山里は冬こそさびしさまされ人目も草も かれぬと思へば

花の色は霞の内にかくれつゝ香をたづねて来る春の山かな

清原元輔

たづねゆく春の山路の山桜霞の内にかをる春かな

曲水宴とよめる　中納言家持

かゝる人の船とゝのへてあそぶ今日を桜の花ぞ散せる

紀貫之　曲水宴　仲春月入花鶯鳴

ふるさとは春の山べの花ぞ散る

坂上是則

花流と聞とゝのへてあそぶ今日の山の遠方

東林院の桜の盛なるを見て

ちりぬる枝ぬれてゆくれた

良暹法師

春の花紅葉ぬれてゆくれたのもの思ふ人を恋ふるね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首和歌

桜咲たる所

祝部山にうつろふ花まちえてまつしもそ咲しはまさる

藤原家隆卿

吉野川岸の山吹咲しをりあらはの桜いろそ果なん

冨士見たる夫後成

為ゆへ雪水かつ人山吹の花の影さへ井手の玉川

堀川院御時百首和歌

若根子清滝川の岩ねをしたる山吹

桜中納言国信

[illegible]

厚見王

かくれ沼の水の下陰なれて今咲ぬらん山吹の花

延喜十三年亭子院御歌合

藤原興風

吳服の山吹の花散りにけり井手の玉川いかゝ今やさくらん

発音舎人く藤花高位なりし

延喜御時

かくてこそ人まくかれ百代とゝまる藤浪の花

天暦四年三月十七日藤花宴

て花ゆへまとゐなりし

[illegible]

天暦御宇

清慎公家屏風

[illegible]

[illegible]

春の花おしなべてうつろひぬ[illegible]

緑なる松のしたなる花なれど[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山家雪[illegible]

宮内卿

[illegible]

百[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今和歌集巻第三

夏歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏衣ときそいくかさねかはるとは散りぬる花のなごりなるらん

春の花乃宇しなくなりぬるかな

前太政大臣後成女

わかれをも惜まぬ人の世なれとも花深乃そこく

卯花如月といふなるらんなるまもなく

四河院帝宇

卯花乃村くさ咲るかきねとはさもさ月乃新ちそころ

太宰大貳宗家

卯花乃咲ぬる時ハ白雪の降ぬくゆるかきねとそころ

永院し伯乃乃ろ河神うらまく

忘れぬるかなしさ

弐条内親王

わすれいとよりの

小伯伯

いるれしを乃神山ハ乃ぶ年ふるまつ二葉ちる陰

家隆四天王院乃陰ふるまつの伯ちろ

前

西園雅通

世ハいまこそわさうの伯し花ハ乃ぶるまつ二もちる伯れ

崇徳院し一百首宇年ゆ乃ろ河文宇

治賢門院安藝

梅りさハ春の下葉ちゆれ乃ぶるまつ二葉ちゆれ乃ぶ花乃なごり孫し

題しらず

花散る春の末つかた藤の花を

かわらぬこと恨しく思ひて

夏草に思ひ乱れて時鳥

なく声とゝやいまゝの世の

加茂しまうて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

所望一部所望いとやとくめる

大中臣雅宣朝臣

新玉の月のやまとしまとしたとし

大納言經信

二部と所望ことさらなる歌ひきうてねさせん

待宿鶯所望といふ心

白河院市子

所望まことに地こけぬ歌ひねこねぬ人と給紙のこと

花園左大臣

詠ら

中宮大夫師房所望ありて

前中納言匡房

神ことらあく所望とこそ

入道前関白右大臣

卯花のかきねの月のうの新まなくや

世の人々所望ことの中

四位少将

青こそ草の居ぬるのあし戻るうへ心ありとこそ

前右兵衛督

ねぬ人くも橋し風ふくやとりうしこそ

詠不知

きうてこそ祝ひまやと所望中くかわやあまの一部

相模

[illegible]

寛治八年[illegible]

[illegible]

[illegible]

二部[illegible]

一百[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一部[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前右近衛大将

有明の月まちえて出ぬれと行とわかれぬ山の端の月

権中納言親宗

杜鵑郭公しのはせてなくなこりをしのぶ

右近衛権少将藤原保季朝臣

ほのかなる夜の明方の郭公

権大納言公雅

いつ来とも人にしられぬ郭公なにをかたらの夜の明まで

前右大将宗家

百首の内郭公

式子内親王

郭公なくや五月の夜やふかき

千五百番歌合

権中納言公雅

郭公鳴ぬ里の夕くれ

前行法師

きくたびに思ふ心の郭公

前参議雅経

山家暁郭公

後徳大寺左大臣

とゝ吹きの風のまくらの郭公

五首歌人々

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左山田左衛門尉殿御使として参られ候五月廿四日

伊勢左馬頭

進しらす

いつ井四郎殿すけとき殿御使として六月廿四日

大納言經信

足しゐ四郎入道のまこと殿御使にて参られ候

前中納言匡房

四こと殿の御使水原殿とそこと殿の御使すとの殿

四郎殿未熟とい[illegible]

藤原基俊

[illegible]

百首寄よませ給ふ

入道前関白太政大臣

五月廿日いはの河原殿まこと殿かてゝ殿の御使にて参られ候

五月廿九日

藤原定家卿

[illegible]

五月廿四日

[illegible]

五月廿四日の御さとと称して完[illegible]

藤原四郎兵衛

百首寄せ[illegible]

前大納言忠良

[illegible]

五月廿九日[illegible]

五十首寄せ[illegible]

藤原定家卿

五月雨の比ほとゝぎすなきわたるを聞て

右兵衛督実時朝臣

建仁元年三月六日合し両度歌出しける

二条院讃岐

五月雨の比ほとゝぎすの時しらぬこゑをきゝて

従二位家隆

雲居なる友よ後成

雲の上に人花橘しのひいでん袖と昔の人をかたらん

右衛門督通具

行幸成て後鳥羽院の御時内裏にて

面前に咲わたるとゝぎすの立花

右衛門督通具

咲わたる花の盛りの立たれ

式子内親王

立花のたれ教行の事ゝ葉をそなへて

前大納言忠良

五十首の時

さ月やみ人しれぬ花橘の袖し濡

前大僧正慈円

雲ゝ人ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家百首寄合

秋

秋夜月

前内大臣

秋夜月

秋夜月

前内大臣

秋夜月

秋夜月

前内大臣

秋夜月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四貫文よりこの名の中より

弐子内親王

[illegible]

夏の寺小くよりこの名の

前大僧正慈円

[illegible]

[illegible]

右上天皇

[illegible]

文治六年 此序八内侍房

入道前関白太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮内卿

[illegible]

四貫文寺[illegible]

前大僧正慈円

[illegible]

延長序 時月次の屏風

[illegible]

[illegible]

壬生忠峯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今和歌集巻第四

秋歌上

中納言家持

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

崇徳院御歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菅原孝標朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文治六年四月十八日内侍所歌合

[illegible]

後徳大寺左大臣

百首歌よみ給ける中に

[illegible]

坂原家隆卿

家隆四天王院障子のためにかきて侍ける百首

[illegible]

坂原秀能

百首歌奉りしとき

[illegible]

宮内卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題知信師

水くきの岩ねをとめてなくこゑに秋の花風

越前

妹ゐてんまちわびくくなるとなほしのうらとまちしくるかな

五十首奇まれ〳〵時秋の奇

萩原雅經

ひるまてとかへりみしかは蓮の葉に秋風うかく

白川信師

なしらす

かりけへて物とこゝろ人まちつるる妹のかゝりせ

わすれいそ玉藻の岩のうらもに秋風さむく袖ぬる

宗徳院百首奇寄名所

里右近衛大将後城

尺ゝのこゝろ山田にてなくてみ袖ぬるる秋いさしかわ

中納言中務卿宮

ゆくらんとよもせ伝なくる

清雅朝臣後京極関白太政大臣

物思ひや三田の里ちて秋ゆくれわと袖ぬるる

中務卿親王

不知

夕雲に萩ちく風あとにあらそ今ゝこゝろ秋をまつ人

後徳大寺左大臣

[illegible]

宗法院殿一百ヶ年忌ニ付

[illegible]

[illegible]

七條院殖方実

[illegible]

[illegible]

藤原孝衡

[illegible]

百首ニ付

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大貳三位

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

定長卿所望序風

紀貫之

[illegible]

山辺赤人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕のとまりの船の棹のたにいく秋かうの雲の月

西園寺中納言

秋きぬと聞くもすさしく久堅の天の河瀬の秋の長くまを

家一西園寺内大臣

入道前関白太政大臣

いつ世世の秋のしるしの天の川の月

七夕の心

星わたる夕浪さえの川の秋の月

右兵衛督

七夕の月の出でぬる浪川いつの秋の月の人

女房

女房

女王

まくらの雁の河波の月の出でぬる

大中臣能宣朝臣

いとしくこそ思ひ七夕の別の神とくるるら秋

中務卿親王

紀貫之

織女の今やとるらん月の川渡りてあるかくせ

法皇

前中納言定家

月の水に秋の花の落て流るる秋萩の花

[illegible]

従二位頼政

[illegible]

[illegible]

[illegible]

久しれさ世散世人乃無常花桜さくあり秋乃月そこく

蘭とよめり　　公歓法師

友待ゆしい祇とも白雪のこゝろ世ゝ乃わ乃ゝ月

崇徳院し百首寺年わ乃ゝ時　　友宗法師卿

こゝ寺ゝ乃雑乃花乃わさ志ゆ秋い宮雄ゝ乃いと乃ん

入道前関白太政大臣百首　　冒左右大臣後成

こゝ乃ゝ世世乃ゝ

ゝとゝくゆ神いゝゝゝまて世ゝ世ゝ世ゝ

山ざくら花の一つのさかれかゝるを枝の名くれ

侯人不知

女房 敦子女王

かゝる木を問ふ人なくて花ばかりさかれかゝるを

百首歌

花落ちてかゝるかゝるを出でくるかゝるとて枝のさかりと

式部卿親王

枝改を改む長家百首歌よりも世俗事

八重院六条

世へにしかゝるまさかりの枝用とわくるかゝるなしく花落ぶ

和歌不合

和歌不合とある歌花とこまと

月ぬしをして世へにわかれて入庶乃次次とる萩の枝用

藤原定家

前大僧正慈円

世へにしかゝるこゝろ故の花のかゝるを歌乃中

崇徳院御百首

世へにかゝるとこゝろつくる名歌の萩乃ゆくしるなりと

大納言行宗

秋歌

秋歌乃ゆくしるに

原重之女

秋をこそ思ひとこゝろ三人家ゝ萩の上ゝ風ゆくし

堀川院百首歌

秋歌

[illegible]

百首すなわち

藤原為家朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十首[illegible]

後京極雅経

絶くやいとのこゝろ[illegible]

秋乃[illegible]

宮内卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時の歌に問てつゝまてうゝ鳴の風の聲を聞まる

法性寺入道前関白太政大臣の家の百首合

野風　　藤原俊成

うゝ四の世路の山のいゝ寺さうゝやこゝろ久敷ちり

千五百番歌合　　右馬頭清輔朝臣

除菜の里の月冬しきさと住まゝ人の枯ゝ

五十首歌　　藤原家隆卿

おゝゝわらきの枯の木のもとにうもれて人なめりの枯のよの月

　　皇后宮大夫俊成

ちりぬ法の歌を五十首歌よませ給ひし

有馬の月後鳥羽の御のうし人なめりの月の稲書

　　摂政太政大臣家百首歌合

　　藤原為家卿

風の後茅の宿の月ふるゝやゝわゝ里人の月の稲つま

水無瀬殿御百首歌　　藤原雅経

武蔵野やいもとゝ枯の里ゝ枯の月の寺ゝ

　　藤原信実朝臣

百首歌ゝ時月の寺の中し

[illegible]

弐子内親王

詠まじなる秋はわが身の若さかな月やあらぬ

迄しらず

月新しき秋は風と吹ゆれども[illegible]

円融院御歌

[illegible]

三條院御歌

[illegible]

堀川院御歌

[illegible]

堀川院御歌

[illegible]

橘為仲卿

[illegible]

清輝朝臣

[illegible]

後三條院

[illegible]

太宰大貳重家

月をれしこゝろしるべの山ぢかな　年の暮れの有りん

和歌所の合に朗詠の月をよめる

藤原家隆卿

ゆふ波や月の光のうつろひて　浪の花にも秋は見てけり

四首の内時秋の中に

前大僧正慈円

夏はなほ煙とわびしかりしかの恨のこゝろ秋の月

題しらず

皇太后宮大夫俊成女

あはれわが秋しいかゝ侘びぬ月のうつるにつけて

藤原家隆卿

深川の三つとさゝ久世の月の光ぞ清き

五十首の内時月前菊花

藤原為家卿

故郷の秋の萩咲くころ絶えぬ月をこゝろ

建仁元年三月廿合し山家秋月をよめる

こゝろ深く作りて

時もわれ告つ人いまもせくこゝろ山の月まわ分る峯の嵐

八月十五夜和歌所に合す浦山月をよめる

と

深くゝ分け入る峯の秋の月いさゝ山ぢの月ぞ清き

月前松風

月ゝ[illegible]の[illegible]の松風[illegible]て秋也そ吹

鴨長明

詠[illegible]ゝ[illegible]物ゝ[illegible]月と[illegible]の松風

山月ゝ[illegible]

藤原秀能

足引の山路の苔の露のうつて秋を[illegible]月とゝ[illegible]

八月十五夜和歌一百首合し海辺秋月と云

宮内卿

[illegible]ゝ[illegible]月やゝ[illegible]物かゝ

[illegible]ゝ[illegible]の秋の夜ゝの[illegible]ゝ[illegible]月ゝ[illegible]

冥秋門院丹後

鴨長明

[illegible]ゝ[illegible]秋の袖月ゝ物ゝ[illegible]

七條院大納言

[illegible]ゝ[illegible]月ゝ[illegible]

和歌一百首合し海辺月と

藤原家隆卿

[illegible]の月やとゝ[illegible]

前大僧正慈円

[illegible]

大白子里

[illegible]

源道阿

[illegible]

上東門院小サ将

かくしもさらぬ秋の月袖にうつる中い

[illegible]

松泉式部

[illegible]

月とともにくらしつる

[illegible]

[illegible]

後京極摂政

[illegible]

相模

永承四年内裏歌合

大納言経信

月新たにさらぬ秋の月袖にうつる中い

[illegible]

左京の猪頭光

[illegible]

[illegible]

景徳院殿一百首歌中より

[illegible]

大宮大納言

[illegible]

道興准后

[illegible]

殿富門院大輔

[illegible]

武蔵内侍

[illegible]

五十首のうち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行末に元もいとかの武蔵野に美濃の原なる月け

雨後月　　宮内卿

月とおなじ秋の夜の物のけしきなる雲の里人

右近衛道具

名不知

煙のあはれ　やうやう月とともに神し侍る秋の上の男

源家長

秋の月　さえのぼる若の新しけてとなりの家にあつまりひ

元久元年八月十五夜和歌所にて百首歌人

月しろしろ

前左近大将

風ふかぬ山の高とまる月やうなりうもしとふ水のうへん

和歌所合百首歌の月と

前大僧正慈円

鶴の子の岸の松の山の月と美濃の原なる月と

前右近衛中将定家

いとはやく風の吹くにしたがひ月をしるべ

雲ぬけて秋の夜の月をしたがひ月をしるべ

前右近衛中将定家

秋の山のわかの浦のいる月と遠の床のさ遠

大中臣定雅

秋の月　宗徳院市内百首歌のうち

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ

百首歌たてまつりし時 秋 中

左京大夫顕輔

秋の山の紅葉しぐれ降りぬれば麓の里は時雨ぞ

秋の中 太上天皇

秋の夕やぬれてぬぎかへ山の端の月

千五百番歌合に 右衛門督通光

さ夜ふけぬ嵐の音とあらそひて月ぞ残れる

秋歌 家隆

秋風に雲の上まで吹ぬれば月ぞ

二條院讃岐

大空の秋の夜の月くまなくぞ袖にあまりぬ

五十首歌たてまつりし時

菅原雅俊

大空の秋さ夜ふけぬ月の

中務卿

月の袖の世にぬれぬる

新古今和歌集卷第五

秋歌下

和歌所にて人々歌よみ侍りける

秋の夕

入道左大臣

秋の夕ぐれは物のかなしきことはいかなる色にか

百首歌たてまつりし時

入道左大臣

山おろしの風に木の葉の散るころ月澄みのぼる秋の夜の空

寂蓮法師

野べ見れば秋の草の葉色々に露置きそめて虫の鳴くなり

後鳥羽院

あらし吹まくにたえぬ雁の恨てのこりの妻とこそなれ

前中納言定房

妻こふる雁の声とこそ聞なれすさまじき秋風を吹

百首歌中に秋の心

惟明親王

秋の夕の木末にかかる白雲やあらしを雁の声

吹風雁とこそ聞なれ

大僧正慈円

秋なれぬ人も哀やあさぢふの雁のはつかりの秋のはつ

百首歌中に秋の心

雁

秋の夜の月の光のあらしやの雁の声

前大僧正慈円

雁の声のあはれ見えて月の光の秋のあはれ

家百首合に秋の心

雁

秋の夜の雁のなくなりて小萩ふく風そこるなる

源道興

こゝろ

夜更て久敷なれぬ秋の夜に雁を聞ぬ

西行法師

[illegible]

白門院[illegible]

[illegible]

中言大史師忠

山里の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]五月雨しらべて田とる[illegible]ね[illegible]こと[illegible]秋[illegible]

中納言家持

今よりは秋風さむくなりぬべし[illegible]

人麿

妹こもれ雁の羽[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

堀河右大臣

[illegible]

雨庭雨後

藤原基俊

[illegible]

白門院[illegible]野[illegible]

[illegible]

贈太上天皇

秋の野の草しとること[illegible]

百首歌中に

寂蓮法師

[illegible]

秋の野の[illegible]

百首歌中に

太上天皇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

[illegible]

寺覚法親王家五十首歌中に

藤原家隆朝臣

[illegible]

百首歌中に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菅原朝臣[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

友原雅經

[illegible]

[illegible]

武子内親王

百首すなわち時

[illegible]

九月十三夜月くもりなく侍りしに

よみ侍りける

道信朝臣

秋くれぬとあはれとおもふ袖の露を

百首すなわち時

友原定家朝臣

[illegible]

[illegible]

よみ侍りける

寂蓮法師

月乃すてよと人の侍りける

大納言師信

秋の夜の月をながめてと題をよめる

九月朝日

花山院の御

[illegible]

五十首すなわち時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

五十首哥たてまつりける時月前関屋といへる

[illegible]

前大僧正慈円

[illegible]

朝恵法師

[illegible]

皇太后宮大夫俊成女

[illegible]

詩あわせしに寄月中山路秋行といへる

藤原家隆卿

[illegible]

五十首哥たてまつりける時菊離月といへる

宮内卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今よわい又咲花もなしに物といくれとなそ菊の露
かまつり野辺の草と　中納言定頼

秋風にたなびく雲の絶間より　中務の卿親王
もれいでる月の影のさやけさ

秋の夜の月の影しあらねば　大江和言
なほうらめしき朝ぼらけかな

今五百番歌合

菊　大伴宿禰家持

咲けばこそ菊の里とは言はるらめ

入日さす林の花の夕風に　藤原定家
なびきそめぬる秋の初雁

わさまちの宿の松しまなくや　床の山風
今五百番の合

つゆ人の袖吹返す秋いたる　右の道之
色かはる萩の葉ゆ見ても　太上天皇
秋の来にけるかなと

秋の来て
咲けばなるるや宿の菊の露　百首歌中に
百年の命ぞ延しきくの月　拾遺古歌

春のやよひの末つかた　独りなんと侍る

千五百番の合し　春宮権大夫公継

祇園にて七月の秋のこころを　今宵の風に吹とくらん

和寺一品宮　六条院

秋の月　前大僧正慈円

秋ふかき清水の月の宵のまに　月と遊ぶ風

菖蒲の花　藤原定家

五月雨の宿のいさらの月のいさらいゆく

杉の戸の夜ふかき月の物思ふ　百首寄

藤蓮法師

かさ松の戸のけ杉の秋ふかし　やさしの風の吹ぬ

さくらの花　中務の卿具平親王

白雲の紅葉ぬるかの山桜　花の数をしらぬ

紅葉遠寄　法橋

うす雪の立まふ山の紅葉　ねをれたみ

秋寄　俊頼

神なびの御室の梢ちるなん　なんて思ふ

家隆　四天王院の障子　清涼門かさ

於摩河ふくさ木ゆくに田数へて山田の原の村雨とそそくく

入道前関白太政大臣家に百首すすめ侍りし

大正天王

ゆくに行末を

宣大臣実俊成

ふしやわ紫いすん立田山おりはのもみちのうい

大井川まゆうれてゐ紫ん紅ゆくし

友定朝臣卿

四つまなくてそんまわ紫と風ハ山の嵐ゆすい

紅葉ゆすい

前内大臣公忠

八月さすさらの山人なくそ原くゆゆ雨と来ハた降いく

百首すすめ侍りし時

信濃卿

立田川わくゝや風ゝよりふしそくゝ水と紅ゆくし

たゝ大ゆゆ紅ゆくゆ時ゆ家に百首すすめ合ゆ紅ゆ

すすくゝ成よりん紅ゆ

摂政太政大臣

桂原ゆくゝ名やかりゆん桂ハ下葉桂ハ天ゆゆ

前内大臣家卿

月ゆゆ浪ゆ人名ゆ月ゆ桂ハ風ゆくし

陳子乃信ゆわゆ月ゆ嵐ゆ嵐ゆ

とよりゆ

源俊頼卿

たつたゝるあきはまつ[illegible]て[illegible]の[illegible]秋風を吹

百首うたよみしとき

式子内親王

桐の[illegible]もふる分かなくめしてくわかるゝ人と行とをれば

題しらず

男称好忠

人まちぬ風にあはれ散果くるくれ[illegible]聲よりはる也

千載法親王五十首うたよみし

玄宮太宰帥

あきの葉の色し但くるを磐木と風しらぬ秋乃山

千五百番うたあはせ

藤原家隆卿

寄時雨恋

しぐるゝ

松ふるさとの木ゝの散くれ[illegible]の秋の風をさそふん

法性寺入道前関白太政大臣家百首合

前参議親隆

鶉なく里のまさきの板あの葉散ぬ中し秋の女をとく

百首うたよみし時

散かるあの葉の色ふるくれしと[illegible]ぬ中

一条院讃岐

しぐるゝ

花ゝ[illegible]八あの葉ゝ[illegible]ちるかつらきの山の秋風吹そしぬくい

柿本人麿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十首奇よりまゐらせ給ひし

守覺法親王

月ゝかへていとゝ秋とおもふかな　ちりしき露の花をみるにも

同九月盡の比　前右兵衛督

ちりてくやしかりけるとてくれ山の

秋ゝの後のわかれをおもふ哉

新古今和歌集

冬部

千五百番奇合し給ひしとよりて

皇太后宮大夫俊成

とゝの国と秋の別の神の宮にまゐりあはせむとて（ものゝ来ぬ）

天暦帝時神無月しぐれ降かゝるまとをとゝく

奇ありけるとき

右兵衛督

神無月風に紅葉ちる時いとゝはらゝとぬれぬとぞ思ふ

藤原定家

石ゝの河やゝ世乃はしさゝ也行末やはゝゝゝゝゝて思へ

後冷泉院御時ゝ乃おのゝこゝゝ大井河よ

ゆゝわゝく行末深水といふゝ所ゝ作り

ゝゝゝよ　　藤原資宗朝臣

代士よまてゝゝゝゝゝ心水といふ中ゝ山乃あゝゝゝゝ

大納言経信

袁乃ゝ行末ゝゝれぬ大井河ゝ乃水八ゝゝゝゝ

大井河ゝ流ゝわて高瀬深水といふゝゝ

よゝゝ絡ゝゝ　　藤原家経朝臣

たゝ世毋ゝゝゝゝゝ

菊の花を

菅原雅俊

紅葉の色をうつしとやちりつもるらん

七条院大納言

白雲つゝ紅葉をうつしとやしたてらん

信実

山里の色をうつすと名高き木葉紅

菅原秀俊

色をうつすとあるいろは異なるなり

祝部成茂

五十首奇題内　宮内卿

かゝるとは秋の勢力や三国にあまねく枝をわけ来也

頼輔つ家千合歌　菅原資隆朝臣

白雲かとうけ来れの陸奥の紙衣の郷

信服　義

白雲とうけ来れの紙衣の郷

はち回基

白雲とうけ来れの紙衣の郷

西園寺信師

月と称するねんごろに情をかわんとてくれば

前大僧正尭忠

秋は月ぞ[illegible]の[illegible]とて敷きてこそ[illegible]風の音ぞ[illegible]

清浦和下

[illegible]入日の[illegible]

山家時雨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今はとてもとまらぬ山のもみぢの夕風

後鳥羽院御歌

ながしらぬ

人をまつ松の里にうつりゆくあれぬ

八重九郎

百首歌奉りし時

枯れ風に吹かれぬ色のいろふかき

千五百番歌合し冬の歌

二条院讃岐

世をうらうらしなどと枯れやすらふ

ながしらぬ

原信明卿

ものいとはの月の月ぞ行くすゑ

中書王奥平親王

紅葉をとどめかねたる山もとのまがきにうつる月ぞこがれ

冒頭門院丹後

次大臣の尾崎のうらにあらしふきて月やもるらん

春日社奇合月暁月といふことを

右馬権頭具

あらしふく神なびの森のもみぢ葉の月

和歌所にて百首歌奉りし時

藤原家隆卿

詠つくしいく度神しくもるらん月ぞ月の月

題不知　　源泰之

定なく世の人の村雨（時雨）にまいく度月を待らん

千五百番歌合　　源具親

今よりは未だくもらぬなれば世の中に秋の月

題しらず

晴るゝ夕べとなりぬれば

五十首歌中に　　藤清師

絶えぬ里とくに月の光のみ世の中に

雨後月　　良暹法師

今ひとたび袖の涙と世の中に

題しらず　　前中納言定頼

家居のよりあはれなるかな月の影

前大僧正慈円

月をとゝのふ袖の涙の色ぞ

小倉山麓の里に住むなれば村雨すれば月ぞ

五十首歌中に　　藤原雅経

秋の色を掛けてや久かたの月の光の

題しらず　　式子内親王

風雪こそ未だ晴れぬ冬くれば春の月新

殿富つ院大納

萩門の内田の面しぬと鴨の水こそわたるいろの冬の月

友原清補朝臣

冬枯の枝の梢葉の色の人しやわらの月の新の色々

千五百番歌合

皇太后宮大夫後鳥羽

さえ侘くえの梢しぐれ来れば有明の月

右衛門督通具

霜結ぶ袖の色てしぐれけて袖のよの月の新を色々

五十首寄月

藤原雅経

新の家の中の月と言ひ出て新しふるさとの岩

橋上月といふことを詠ける

清原幸清

かつらきの神とや言ひかつらの月しよりの橋姫

法眼宗之

夏の月神のつの枝かまくれ月まわるいそのやりん

藤原道信朝臣

内裏にて初冬の月を見てよめる

冬の中に

大上天皇

冬の月よのかりとと送る神なれば暖かこのうもれわるよ

百首奇せ一時　　藤原為氏卿

さく人の葉いみじうもさかりおそくよりて咲わるしと

崇徳院御時百首奇せまりける

　　友原信俊朝臣

春こそは花の盛りなるものとのみしるべくあるよと

　　従五位下

　　賀茂在実後成女

霞かすみそこ見みぬ葉の葉末にはかりなるかなと

百首奇せる

　　前大僧正慈円

霞ゆゑ山のゆくへもなるものとうつろふ

題不知

　　前祭酒忠

葉のうへにあらぬ白雪とのみ見ゆるかな冬ゆ

　　中納言家持

鶯の後せる梅しとく霞のたちをれ枝をうへにうへのこゝろくわく也しかるに

　　延喜御時

時雨つゝ紅葉重なれる白ふる郭

　　延喜十四年尚侍ふるいこ蒙高

もせりける時

　　中納言通俊

葉花をわくる人しなかりけるとこそ思ふ

　　大井河行幸仰せられける日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風吹とゝまるまでの所思ひ心なき涙しなくまでの所

れる〜所　　拾大納言通光

浦人の日と夕暮しなるこかと吹る神わすれなくも

文治六年女房入内屏風

正三位季経

風さわぐ雨の夕の山のしたるる色浪の白わ

五十首の中に　　藤原雅経

さらぬ山やはくもいくよの水数ふる雪の袖の

堀川院百首の中に　　河内

水色の月かとのこれはうらぬ浪の松しそよつあらん

湯原王

笹〜ら山　　高市

吉野の山なれとの河のかいなしに時雨ふるく

詠同法師

国のよしかくへこそやもひ初めの月初しの嶽の

法橋慶円

さて浪や立つのくる海風さて浪の月ねし嶽の

人麿

大田の野とあさらの山顕の法寺寺の

雲のわ〜の基俊かりくへ戸にいくる

[illegible]

遠し

[illegible]

冬乃行よと[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年の雪や積んでいよいよかしこく秋さむ也

夜深風雪といふことを

[illegible]

刑部卿 能茂

うへの花の雪のまがきの[illegible]

うへの花のことを燒香しいつかんとた

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
よませ給けるとし伏見里の雪と

菅原有家朝臣

[illegible]
家に百首こゝよりよませ給けるに

入道前関白太政大臣

[illegible]
[illegible]

赤人

[illegible]
[illegible]
延喜帝時こゝまれたれと作りまゝれた

紀貫之

雪のうへや積ぬらん思ふ山里に敷てゆとの年を積れる

[illegible]百首歌を五十首こゝよりよませ給けるに

冬

雪ふる[illegible]

[illegible]

[illegible]月みるに天のかくし山

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬季の内の祈願人の名をこゝに書とゝめ名々の人物を
書わけ家内安くよう祈る

熟年く遠つゝゝ人（はるかいくとせ）に成ぬ庭の上の雪
一百貫文中ま　太上天皇

氏治に茅し行堅し枝まなしこゝに和の上の雪
五十五百貫文合ま　右馬権頭具

茅ま茅と成わ内のこゝろ雪とけて行梅の花のそゝる
一百貫文ゝゝゝ時　黒徳院内

尺わすゝ文野の三氏ま法わ吹ま雨ゝ花もそゝて
内大臣一位久ゝ時家の合ま

市場と書ゝゝ茅と求食つゝ好この野ゝ久ゝ
京極宰相中将政方卿

尺わ野ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雪ゝ
鷹狩の人ゝ氏ゝ

狩ゝゝゝ飛ゝ茅ま折て庭の内世の月ゝ
左近中将公衡

清性ゝ人遠茅岡田左政方卿
前中納言定房

陽院の合し

埋火とよろう　　特仏心永縁

中くまさていさこうて埋火のいとてしかしなとさ有さ

西行の歌　　式子内親王

思数ふる雲々まはさる庚寅の烟ときこゆ大原の里

感言し人々はいかいしくらう

とうはいかいなとてふ人やとてやとて物思ひ言ふ

やしうしうれしよさと約らう

西行法師

かりて、身とふれとおもう言り手とはうとてふん

上西門院兵衛

思ふ后宮大夫儀成　女イ

やうてしたをや樵夫よりうしうしたとはく

後成つ事十首寄よりと約らう歌言

うしうしう成　　後鳥羽法師

歌つ今年も言ぬ雪乃命いうる年と思出ふく

百ニ言年一所　　小侍従

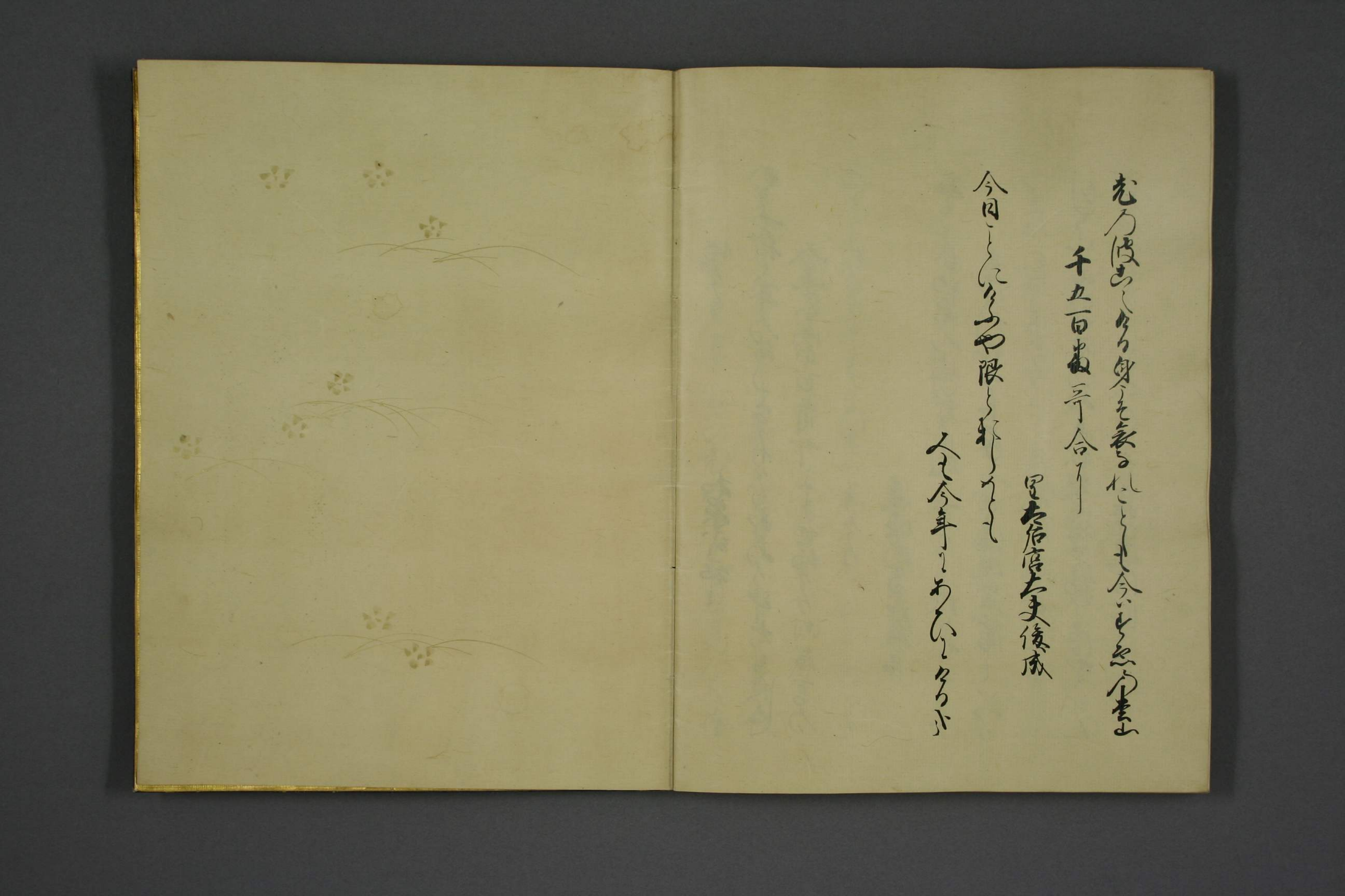
ふしや是八十の年の言るれしうる年ふい物を出てさ

送しうす　　西行法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]



千五百歳ニテ合ヲ

冒頭宮内卿成

今日こそ千ちよの限りなれ

人も今年ぞあひぬらむ